

20 歳のころ

B 班 黒田 笹谷 照屋 吉村

＜研究動機＞

インタビューをするにあたり、私たちは万人に知られているような大企業を支えている人について知りたいと考えた。その中で私たちは、「贈り物」に目をつけ、株式会社ヨックモックにインタビューをお願いし、総務人事部に勤務されている桶谷様にお話を伺わせていただいた。

＜取材させていただいた方＞

株式会社ヨックモックホールディングス

総務人事部 人事グループ長 桶谷武史 様

＜桶谷様について＞

大学を卒業後、株式会社ヨックモックに総合職として入社。1 年半ほど店舗にて勤務されたのち、異動となり営業企画を 4 年間担当。その後総務人事部に異動され、現在は人事グループ長として活躍。

＜会社概要＞

企業名 株式会社ヨックモックホールディングス

創業年 1969 年 8 月 8 日

従業員数 852 名 (グループ合計)

今年で設立する 55 周年を迎える大手洋菓子メーカー。スウェーデン北部にある町の名前が社名の由来。東京・青山に本店を持ち、日本各地の百貨店、駅、空港などおよそ 150 店舗を展開している。創業者の藤縄則一による「お菓子は良い環境から生まれる」という理念により、ヨックモックは樹齢 300 年以上の大杉が続く栃木県日光街道に程近い自然豊かな地と鮎釣りで知られる清流、思川のほとりでお菓子を製造している。ロングセラーとなっているシガールは 1969 年に誕生。巻いた形状は薄い生地強度を与えるため生み出されたもの。普通のクッキーとは違い小麦粉の配合が少なく、バターを多量に使用している。試行錯誤を重ねることで誕生したシガールはサクサクとした軽い口当たりと繊細なくちどけで今もなお多くの人に愛されている。

<インタビュー内容>

Q. 二十歳のころに夢中だったこと

A. 学業よりも当時アルバイトとしてやっていたサッカーのコーチ。中学生のコーチをされていたそうで、休日はもちろん、平日も週 3~5 日 18 時ごろから練習をしていた。

Q. 二十歳のころに身につけておいた方がよいこと

A1. アルバイト、学校などで今まで話したことのないような人と話しておくこと。桶谷様の場合、サッカーのコーチをしていたことで選手の親御さんなどの人と触れ合ってきた。色々な人と話をすることで、自分の意見を話す・相手の意見を聴くという感覚が身につく。大人と触れ合い、相手への伝え方・聞き方を学んでおく。

A2. なにかやりきったという経験を作っておくこと。壁にぶつかった時のアプローチの仕方を知っておくと役に立つ。仕事をしている上でも自分の経験がないことへの対応は度々あるため、自分なりのスタイルを見つけて自分の強み・弱みをはっきりさせておくといい。

Q. 二十歳のころ、なりたかった職業とそのきっかけ

A. 正直言ってこの職業になりたい、こんなことをしたいといったビジョンはなく、漠然としていた。ただ、サッカーという「チームスポーツ」を長いこと続けてきていたので、問題に対して一人で立ち向かっていくのではなく集団で対応していく職業の方が自分に向いているのだとうとは思っていた。具体的に売るといいう仕事に集中し始めたのは大学三年生、就活が始まった時期から。

Q. 二十歳のころの成功と失敗について

A. 成功：高校までは強豪校のサッカー部でプレーをしていた。大学に入ってから経験のないコーチという仕事をした。どちらも結構大変なことではあったが、なんとかやりきれた。頑張ればなんでもやり切れることを知れたことは成功のひとつ。

失敗：自分の性格上今までやってきたことで失敗と思うことはあまりなくて、むしろ全て経験だと思っている。色々な場면을振り返って考えるとその一場面としては失敗かもしれないが、長い目で見ればそれは失敗とは言えない。

Q. 人生の分岐点・ターニングポイント

A1. 学生時代。具体的には小6から中1頃のこと。地元サッカーチームに所属しており、それまでは自由に練習をしていた。その後選抜チームに選ばれ気が大きくなっていったが、選抜チームのメンバーを見て自分が井の中の蛙であったことに気がつく。上には上、下には下がいることをそこで知り、自分の水準と目指すところを高い位置に置くようになった。

A2. 社会人時代。営業企画から総務人事に異動したこと。企画では主に半年から一年先のことを考えるのに対し、人事では三年というスパンは当たり前で、十年先を考えることもあるそう。ここから物事を考える深さが変化し、長い目で見えるように視野が広がった。

Q. 二十歳のころと現在の「働くこと」に対する認識の違い

A. 二十歳の頃というよりは新入社員時代にはなってしまうが、与えられたことを指示されたように処理していた。言い方を変えれば指示待ちをしていて、指示されたことを淡々とこなしていた。しかし現在では自ら課題を見つけ、それを達成・解決できるように行動している。会社の価値を高められるよう自分で仕事を作り出し、遂行するという点が新入社員時代と異なっている。

Q.これから社会へ出る人へのメッセージ

A.他者ではなく自分を知って欲しい。今まで興味はあったけれど手を出していなかったり苦手なことにチャレンジをして自分の得意なこと・苦手なところを再発見することが大切。人とのやり取りする上でも自分を知るということはベースになってくる。自分に関心を持ってもっと自分自身について振り返って整理し、さらに理解を深めていってほしい。社会に出ても勉強することは何度も何度もあるので、自分の特徴や自分に合った勉強の仕方などを知っておくとさらに成長しやすい。色々なことに興味を持ってチャレンジしてほしい。

<最後に>

今回桶谷様にインタビューさせていただき、自分たちはこれからだという可能性を再認識し、新たなスタートを切るきっかけとなった。大学生という今しかない時間に自分の強みや弱みを知ること、一つのことを成し遂げること、挑戦することを心掛けることが大切だと学んだ。インタビューで最も印象に残ったのは、「一部分で見たら失敗かもしれない。けれど全体としてみれば、それは成功だった」というお言葉である。挑戦して失敗したとしても、挑戦したということが成功だという考え方に、チャレンジをするということへの勇気をもらった。そのほかにも自分を知るという点では自分の特性を知っておくことが、職業選択やその後の働く場面でも必要となることを学んだ。普段のさりげない活動が自分を知る機会だと見直した。今後の大学生活を通じて様々な挑戦、経験をし、もっと自分自身について知っていこうと感じた。

また、二十歳のころを終えて、自分たちがいかに未熟であるかについて気が付かされた。初めて自分たちでアポイントを取り、インタビューをさせていただき、思うようにいかないことも多々あった。そして今回の反省点を次回に生かそうという貴重な経験ができた。今回のインタビューでいただいたお言葉を胸に残りの大学生活での「挑戦」を大切にしていきたい。